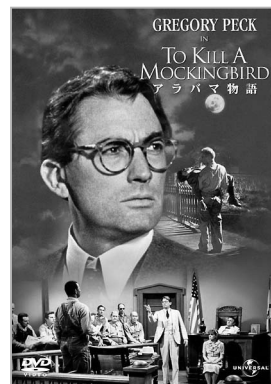


『アラバマ物語』

1962年／アメリカ／ロバート・マリガン監督作品

鮮烈な印象残す弁護士アティカス 親子の愛情と成長の物語

会員 岸 敦子 (61期)



『アラバマ物語』
発売元：ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント
価格：1,800円(税込)

弁護士のでてくるテレビドラマや映画は多いが、中でも本作の主人公、アティカス・フィンチの印象は私の中で鮮烈である。

妻に先立たれたアティカスは、アメリカ南部アラバマ州の田舎町に二人の子供と一緒に住んでいる。息子のジェムと娘のスカウトは、近所のディルと一緒に元気に外で遊びまわる毎日だ。近所の家には、「ブー」という名の恐ろしい人物が住んでいるらしい。

アティカスはある日、白人女性に暴行したという嫌疑をかけられている黒人青年の弁護を引き受ける。人種差別が激しい南部の小さな町で黒人を弁護することへの風当たりは強く、アティカスと子どもたちは様々な妨害や中傷を受けることになるのだった…。

こう書くと、重い社会派映画だと思われるかもしれない。確かに、話の筋も、扱うテーマも深刻なものがあり、暗い映画と言えなくもない。しかし、この映画はそれだけではなく、親子の愛情の物語でもあ

り、子どもが礼節や思いやり、社会の現実を学んでいく過程を描いた成長物語でもある。映画全体としては、法廷ものというよりもホームドラマに近い。

私が最初にこの作品を観たのは大学生の頃だった。弁護士になってからDVDを再度観てみると、法廷の場面や登場人物が弁護士の仕事について語る場面など、昔とは違うところにも注意を引かれた。それでも、静かに、かつ毅然たる態度で信念を貫くアティカスは今見てもやはり格好良く、お転婆娘のスカウトはやはりとびきり可愛かった。アティカスを演じたグレゴリー・ペック（映画『ローマの休日』では新聞記者の役を演じていた。）は本作でアカデミー主演男優賞を受賞したそうである。画面はモノクロ、私が生まれる前に制作された映画だが、現代でも十分に通用する内容だと思う。様々なことを考えさせてくれる、温かみのある映画である。是非ご覧いただきたい。